

## 064 罪深い女を赦す

ルカによる福音書 7 : 36～50

36 さて、ある ファリサイ派 の人が、一緒に（宗教的、道徳的講話を聞くために）食事をしてほしいと願ったので、イエスはその家に入って 食事の席 に着かれた。

→ 食事の席 の主催者であるファリサイ派のシモン（40 節）は、イエスがメシアであるかを疑い、試すために食事会を開いた。

### 【参考】ローマ人の食事の席（寝転んでの食事）



ローマの富裕層たちは、邸宅の中にある「トリクリニウム」（ギリシア語で「3台の臥台」という意味）と呼ばれる部屋で、「レクトゥス・トリクリナリス」と呼ばれる食事専用の臥台（寝椅子）に寝そべて食事（晚餐）会を行った。元は小アジアの習慣で、埋葬時の死者を表し、この習慣がギリシアやエトルニア（BC8 世紀から BC1 世紀頃にイタリア半島中部にあった都市国家）に伝わり、ローマへと広がった。

寝た姿勢で食事をするのは不便であったが、貴人のステイタスとして採用された。

寝椅子「レクトゥス・トリクリナリス」は木材、青銅、象牙、銀などで作られ、テーブルに向かって少し上向きの傾斜があり、その上にクッションやクロスを敷いて使用した。

食事の作法としては、①左脇を下にして寝そべり、②左の肘で体を支え、③右手でテーブルに置かれた食べ物を素手づかみで取って食べた（ナイフやスプーンを使って食べることもあったし、左手を使うこともあった）。

1 台のレクトゥス・トリクリナリスは 3 人用で、3 台のレクトゥス・トリクリナリスがテーブルをコの字形に囲むように置かれた。通常 9 人ないしは 10 人程度で行われるのが一般的だったが、その他に特別来賓用として、主に VIP をもてなす少人数用の小さなトリクリニウムを備えた邸宅もあった。

また、座席には上席や末席があって、社会的地位によってその位置が厳格に決められていた。

列席者の主賓は馬蹄型上辺にあたる臥台の一番左側（下図①）に座った（①の位置は「執政官の座」と呼ばれ、日本でいうところの上座である）。以下、上辺の左から右（②から③）、左辺の上から下（④から⑥）、右辺の上から下（⑦から⑨）、という順番になっていた。

招いた邸宅の主人は左辺の上部で、主賓と会話できる位置をとることが多かった。

マナーとして、出席者は公服である「トガ」という白く細い毛糸（ウール）で織られた服で正装（男女に大きな違いはない）をしなければならなかった。ローマの元老院の議員たちが着る布を巻き付けたような服で、布幅は、身長の3 倍もあった。通常、ローマ人は「トゥニカ（チュニカ）」と呼ばれる短衣を着ており、トガはそのトゥニカ（チュニカ）の上に体に巻き付け羽織った（外国人・奴隷・解放奴隷は身に付けることが許されなかった）。トガは高価だったため、持っていない者は招待主から借りて着用した。トガに代わるものとして、食事に使うの使い捨てのいろんな色で出来た服「シュンテシス」を着ることもあった。

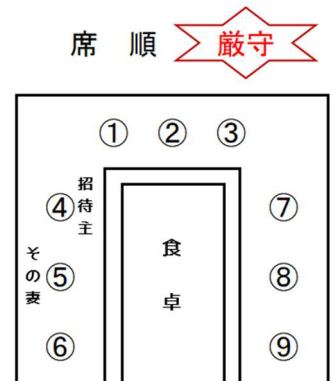


なお、料理は、前菜、メイン料理、デザートというコース料理がふるまわれた。世界中から珍味などが集

められ、満腹になると鳥の羽で喉を刺激して、食べた物をすべて吐き出して、また、次の料理を口にする者もいた。メロン、牡蠣などはローマ人が食べ始めたと言われている。  
ローマ帝国の哲学者セネカは、「ローマ人は食べるために吐き、吐くために食べる」と評した。

**【参考】**庶民の男性は、正装として腿丈のトゥニカの上から無地無染色の自然のままの羊毛の色（濃いベージュ）のトガを着た。トガを着つけるのは非常に煩わしかったので、BC1 世紀頃から日常ではトゥニカを二枚重ね着したり、ギリシア風外套を着るのが普通になった。トゥニカは古代ギリシアのキトンから発展したもので、ウールでできた大判のTシャツのような服で、五分袖から七分袖程度の袖が付き、膝下丈（労働時にはベルトでたくしあげて膝上丈）で着た。袖や裾が長いものは軟弱だとされ嫌われた。  
トガが現在のスーツなら、トゥニカはシャツとジーンズのようなもので、貧しい市民はトゥニカだけを衣類とした。

※参考：最新世界史図説タペストリー（帝国書院）／日伊相互文化普及協会  
古代ローマライブラリー／ウィキペディア「トガ」



\*\*\*\*\*

37 この町に一人の罪深い女がいた。イエスがファリサイ派の人の家に入って食事の席に着いておられるのを知り、香油の入った石膏の壺を持って来て、38 後ろから（レクトゥス・トリクリナリスと呼ばれる食事専用の臥台に寝そべて食事をとっている）イエスの足もとに近寄り、泣きながらその足を涙でぬらし始め、自分の髪の毛でぬぐい（→拭い：汚れを消し去り）、イエスの足に接吻して香油を塗った。  
→石膏の壺は、アラバスター（雪花石膏）と呼ばれる柔らかく美しい石で作られていた。  
→通常は、主人の家の戸口に召使が立ち、入室をチェックしていた。しかし、宗教熱心なユダヤ人たちは、貧しい人たちも中に入って話を聞けるように、門戸を開いた。傍聴者は食卓には着けず、離れて立ち、ラビや主人の話を聞いた。



39 イエスを招待したファリサイ派の人はこれを見て、「この人がもし預言者なら、自分に触れている女がだれで、どんな人か分かるはずだ。罪深い女なのに」と思った。  
→罪深い女は、マグダラのマリアであるとする考えがあるが（聖書に明確な記述はない）、この女性が誰であるかは不明である。ユダヤ教の律法によると罪人に触れた者は汚れるとされ、一定期間、隔離される。ファリサイ派のシモンは、自分を汚れさせる人々と接触することを常に避けていた。そのため、イエスが罪人を自分に触れさせたことに驚いている。

40 そこで、イエスがその人に向かって、「シモン、あなたに言いたいことがある」と言われると、シモンは、「先生、おっしゃってください」と言った。

41 イエスはお話しになった。

「ある金貸しから、二人の人が金を借りていた。一人は五百デナリオン、もう一人は五十デナリオンである。42 二人には返す金がなかったので、金貸しは両方の借金を帳消しにしてやった。二人のうち、どちらが多くその金貸しを愛するだろうか。」

→1 デナリオン＝労働者のおよそ1日分の賃金である（マタイ 20：9）。

43 シモンは、「帳消しにしてもらった額の多い方だと思います」と答えた。

イエスは、「そのとおりだ」と言われた。

44 そして、女の方を振り向いて、シモンに言われた。

「この人を見ないか。わたしがあなたの家に入ったとき、あなたは①足を洗う水もくれなかったが、この

人は涙でわたしの足をぬらし、髪の毛でぬぐってくれた。45 あなたはわたしに②接吻の挨拶もしなかったが、この人はわたしが入って来てから、わたしの足に接吻してやまなかった。46 あなたは③頭にオリーブ油を塗ってくれなかったが、この人は足に香油を塗ってくれた。47 だから、言うておく。この人が多くの罪を赦されたことは、わたしに示した愛の大ききで分かる。赦されることの少ない者は、愛することも少ない。」

→当時、大抵の人たちは動物の皮などを紐で足の下にくくりつけたサンダルを履いていたので、来客用の足を洗うための水が常備されていた。

客は頬に口づけの挨拶と頭にオリーブ油を注がれて、迎えられた。

48 そして、イエスは女に、「**あなたの罪は赦された**」と言われた。

49 同席の人たちは、「**罪まで赦すこの人は、いったい何者だろう**」と考え始めた。

50 イエスは女に、「**あなたの信仰があなたを救った**（=癒した）。**安心して行きなさい**」と言われた。

#### 【参考】ヤコブの手紙 2:20~24

ああ、愚かな者よ、行いの伴わない信仰が役に立たない、ということを知りたいのか。神がわたしたちの父アブラハムを義とされたのは、息子のイサクを祭壇の上に献げるという行いによってではなかったですか。アブラハムの信仰がその行いと共に働き、信仰が行いによって完成されたことが、これで分かるでしょう。「アブラハムは神を信じた。それが彼の義と認められた」という聖書の言葉が実現し、彼は神の友と呼ばれたのです。これであなたがたも分かるように、人は行いによって義とされるのであって、信仰だけによるものではありません。

→ヤコブの手紙は、キリスト者の生活における行いの重要性、つまり、「信仰は行いによって全うされる」「信じていれば必然と行いが伴う」ということを確認してもらうために書かれたが、信仰と恵みによって人は救われることを主張する、ルターは、人の行いを強調するヤコブの手紙を藁の様に燃やしてしまえばよいと考え、「藁の手紙（書簡）」と呼び、否定した。

「行いによって義とされる」、このヤコブの主張は一見するとパウロの「信仰によって義とされる」と反対の立場のように見える。また、ヤコブは「他者の前で義とされること」について語っており、パウロは「神の前で義とされること」について語っているとも言える。

人間に救いをもたらす信仰は愛によっていきいきとしたものとされ、その愛は行いを伴うのである。使徒言行録 26:20 で、パウロは「悔い改めて神に立ち返り、悔い改めにふさわしい行いをするよう」と記している。これは、パウロがヤコブの言う、信仰は行いを伴うという考え方を示したものである。

【参考】新約聖書(各書)のタイトルに「男」と「女」が入った章節

マタイによる福音書 9 : 18 - 9 : 26	指導者の娘とイエスの服に触れる女 ※1 =ヤイロの娘とイエスの服に触れる女 (マルコ5 : 21 - 43、ルカ8 : 40 - 56)
マタイによる福音書 15 : 21 - 15 : 28	カナンの女の信仰 ※2 =シリア・フェニキアの女の信仰 (マルコ7 : 24 - 30) →カナンの女=カナン人(≠ユダヤ人)の女
マルコによる福音書 1 : 21 - 1 : 28	汚れた霊に取りつかれた男をいやす ※3 =汚れた霊に取りつかれた男をいやす (ルカ4 : 31 - 37)
マルコによる福音書 5 : 21 - 5 : 43	ヤイロの娘とイエスの服に触れる女 ※1 =指導者の娘とイエスの服に触れる女 (マタイ9 : 18 - 26) =ヤイロの娘とイエスの服に触れる女 (ルカ8 : 40 - 56)
マルコによる福音書 7 : 24 - 7 : 30	シリア・フェニキアの女の信仰 ※2 =カナンの女の信仰 (マタイ15 : 21 - 28)
マルコによる福音書 10 : 17 - 10 : 31	金持ちの男 =金持ちの青年 (マタイ19 : 16 - 30) =金持ちの議員 (ルカ18 : 18 - 30)
ルカによる福音書 4 : 31 - 4 : 37	汚れた霊に取りつかれた男をいやす ※3 =汚れた霊に取りつかれた男をいやす (マルコ1 : 21 - 28)
ルカによる福音書 7 : 36 - 7 : 50	<b>罪深い女を赦す</b> →罪深い女=マグダラのマリア (聖書に明確な記述はない)
ルカによる福音書 8 : 40 - 8 : 56	ヤイロの娘とイエスの服に触れる女 ※1 =指導者の娘とイエスの服に触れる女 (マタイ9 : 18 - 26) =ヤイロの娘とイエスの服に触れる女 (マルコ5 : 21 - 43)
ヨハネによる福音書 4 : 1 - 4 : 42	イエスとサマリアの女
使徒言行録 3 : 1 - 3 : 10	ペトロ、足の不自由な男をいやす
ガラテヤの信徒への手紙 4 : 21 - 5 : 1	二人の女のたとえ →二人の女=①アブラハムの妻サラ→息子イサク ②サラの女奴隷ハガル→息子イシュマエル
ヨハネの黙示録 12 : 1 - 12 : 18	女と竜 →女=イスラエルもしくは神の民全体としての教会の象徴 →竜=サタン

【参考】共観福音書の資料的な関係

